シニアのシニアによるシニアのための会報誌

ちゃらんぽらん

# かわら版

2020
3号
令和2年1月15日

## 特集　先達への敬意と感謝

加州の大地に生きた日本人

心がホッコリする話
チャランポラン エッセイ
ジャーナリストの目
素敵な人見つけた！

## チャランポランの会は何をする会？

チャランポランの会は、シニアを応援する会です。

❶ 会報誌「かわら版」を通して、シニアの方々を元気にしていきます。❷ 会員同士の交流の場を提供し、楽しみや生きがいを持てるようにします。❸ シニア向けの講演会、イベントを開催していきます。

## 会員になるには？

原則シニアの方であれば、どなたでも会員になれます。別紙の入会書に必要事項を記入し、チャランポランの会まで郵送して下さい。なお、入会書がない場合は **❶ 氏名 ❷ 住所 ❸ 電話番号 ❹ かわら版を何でお知りになったか ❺ 出身地 ❻ Eメールアドレス（オプション）❼ 生年月日（オプション）** をお書きの上、チャランポランの会まで郵送してください。Eメールでお申し込みの場合も上記の内容（①～⑦）を忘れずにお書き下さい。

**【郵送先】** CharanPoran USA
22301 S. Western Ave. Suite 104
Torrance, CA 90501

**【Eメール】** charanporanusa@gmail.com

現在会費はありませんが、今後皆様からのドネーションはお受けいたしますので、よろしくお願い致します。今までドネーション頂いた皆様、ありがとうございました。心よりお礼申し上げます。

## 会員の特典は？

１年に４回発行される会報誌「かわら版」が届きます。
講演会やイベントなどに会員特別価格でご参加頂けます。

### 「かわら版」への投稿方法

●川柳：お一人１句　●読者の声：２００字以内
●エッセイ：約７５０字

住所・氏名・年齢・電話番号を明記。郵送、又はEメールでお送りください。なお、紙面の都合で内容を割愛、又は一部編集させていただく場合もございますのでご了承下さい。なお、投稿が多数の場合は、チャランポランの会で選定させていただきます。

### 「かわら版」へのご意見ご感想

ご意見、ご感想をお気軽にお寄せください。CharanPoran USA 迄郵送いただくか、又はEメールでお送り下さい。今後の会の参考にさせていただきます。

**２０２０年４月１日「かわら版」４号、発行予定！**

## 会の名称
## 『チャランポラン』

私達、発起人は二十代から六十代まで長い間、一応真面目に仕事し、子供を育て、一社会人・一家庭人としてそれなりの責任を果たして来ました。ふと気が付いて見ると、もう高齢者です。昔の元気はなく、体力も落ちました。これからの人生をいかに生きるかと考える時、やはり明るく元気に過ごしたいものです。それには今までの常識の枠を離れ、自由な新しい発想や考え方で生きるのが良いのではと思います。

その理想が「チャランポラン」です。一見、「真面目や責任」とは対極にある考えのようですが、今まで以上に豊かに生きるために必要なキーワードかなと思います。認知症防止のためにも、是非皆さん、一緒に楽しく、チャランポランに生きましょう！


**チャランポランの会**

■発起人
鳥居欣一、雲田康夫、高山秀男、鶴亀彰
■かわら版／編集
北村亜矢、佐伯和代



**CharanPoran USA**
22301 S. Western Ave. Suite 104
Torrance, CA 90501 USA
☎ 310.347.7300
Email: CharanPoranUSA@gmail.com
www. CharanPoranUSA.com

Dora E. Schoonmaker　1851- 1934
アメリカ合衆国のメソジスト派の伝道師

# 心がほっこりする ほんとうのお話

## 若き乙女の一粒の種

「蒸気船はポーポーと白い煙を吐いてアメリカから28日間の船旅の末、横浜港に錨を下ろしました。1874年10月の夕暮れことでした。後ろには太平洋の白波が畝っておりました。私は大きな希望と少しの懸念を胸に、こうして日本の土に一歩を印したのです。」

これは、太平洋の波濤を越えて横浜に上陸したドーラ　スクーンメーカー女史の感慨の一節です。彼女は米国のメソジスト派の宣教師で、日本に訪れた女性宣教師第1号です。当時23歳のうら若きドーラ女史はたった一人で日本へ赴任してきました。強い信念があったとは言え、まだ日本は明治維新が始まって6年目、正に激動の時代でした。

米国にとって日本は未開の異郷で、サムライのしきたりがまだ色濃く残り、キリシタンは邪宗と考えられていました。明治新政府は邪宗禁制の高札を取り外ずそうとした直後でしたが、依然として明治政府のキリシタン迫害政策は残存していたのです。その状況下で、若干23歳の乙女が、全く異なる文化と言葉の通じない国へ単身で来たのです。彼女が持っていたのは布教という自己犠牲も惜しまない信念と強い決意だけでした。

当時の日本はまだ近代の夜明け前で、学校制度が確立していませんでした。彼女はキリスト教の普及には、まず民の教育が大切であることを悟り、果敢に行動に移します。翌年の1875年11月16日、現在の東京の麻布に女性の教育に重点を置いた『女子小学校』を開校しました。女子生徒7名（生徒が足りず2名は男子）で、お寺（薬師堂）の一部を借りました。本堂の一部をカーテンで仕切り、木魚の音が聞こえる中で授業が行われたと言われています。

この『女子小学校』は145年続いている後の青山学院の源流で、その開校日は青山学院の創立記念日になりました。青山学院の2019年までの卒業生は30万人超、幼稚園から大学院まで有する日本有数の総合学園となったのです。

一八七九年、5年の任期を終えてドーラ女史は帰米しましたが、その後の消息は長い年月の中で風化していき、墓石もどこにあるのかわかりませんでした。そのことを知った青山学院の卒業生が発起人となり、1980年、青山学院本部とロサンゼルス校友会の共同で創立者のお墓を探すプロジェクトが発足しました。ドーラ女史がニューヨーク出身ということもあって、東海岸をはじめ、全米の宣教師名簿を頼りに、ドーラ女史の足跡を探し始めました。そして、5年が経過した1985年、ロサンゼルス近郊の日系人が多く住んでいたボイルハイツ地区の小さな霊園に、ようやくお墓を見つけたのです。しかし、スクーンメーカー家は、誰も訪れることのない無縁墓となっていました。そこで、ロサンゼルス校友会と日本の青山学院本部が中心となり募金活動が行われ、その霊園に創立者であるドーラ　スクーンメーカー女史のお墓が建立されたのです。

このお墓は、現在ロサンゼルス校友会によって守られ、毎年創立記念日の11月16日には墓前礼拝が行われています。2019年は145年目の節目の年でもあり、日本から青山学院理事長、校友会会長が墓前礼拝に出席されました。

ドーラ女史の蒔いた一粒の種、愛と奉仕、熱き使命と信念が145年を経て大きな大輪の花となり、多くの学生に、学院のモットーである、〝地の塩、世の光〟を深く刻んでゆくことでしょう。

青山学院交友会LA支部会長
雲田康夫

# 行動するシニアをめざして！

鳥居　欣一

昨年のドジャースはワールドシリーズ優勝はおろか、進むことすら叶いませんでした。我が家の男性軍（といっても私と息子と孫の三人ですが）は熱烈なドジャースファンです。強い時も弱い時も変わらぬ応援をし続けています。ワイフと息子嫁は、チームではなく、野茂、イチロー、大谷選手など、その時その時の日本人選手の活躍によって声援が変わっていきます。今は、大谷君一辺倒です。

## 《　高校野球に思う　》

昨年の日本の夏の高校野球で、大船渡高校の佐々木投手は、監督の意向により決勝戦で投げることを回避させられました。連投で大事な肩を壊すことを懸念したからだと思いますが、もし決勝戦で彼が投げていたら、晴れの甲子園に出場を果たしていたかもしれません。しかし、将来のことを考えると監督の判断は正解であったと、多くの専門家やファンは納得しているようです。そこに異を唱えたのが、球界の御意見番といわれる張本氏でしたが、彼の意見に同調する人は少数でした。私は、もっと喧々諤々議論されてしかるべきではなかろうかと今でも思っています。まぁ議論しても恐らく体制は登板回避の意見が強いのだとは思いますが、何か物足りなさを感じてしまいます。投げて甲子園に出て、優勝という栄冠を勝ち取る機会をみすみす逃がしてしまうのは勿体無い気がします。仮に、登板したことによって肩を壊してしまい、野球人生を終わらせる結果となっても、後々後悔するよりもマシだと、私なら「チャンスがあるその時」にチャレンジする方を選びます。将来プロの世界に入れたとしても、絶対活躍するという保証はないからです。高校野球で優秀な選手達も、何もプロ野球に進むだけが人生ではないと思います。プロ選手として活躍することの活躍が出来る筈です。人生は山あり谷あり、色んな道を歩くことで人間は強くなれるのです。

## 《　失敗続きの人生　》

昨年の秋、ある団体の依頼を受け、ここ南カリフォルニアの二ヶ所で「在米５０年の回想」と題して講演する機会がありました。過ぎ去ってしまえばあっという間の半世紀でしたが、本当に様々な事がありました。どちらかというと失敗のオンパレードで、中でも大ハプニングは二度ありました。一つは、２０年勤めた会社を退職したことでした。子供達がまだ高校生と中学生で何かとお金も掛かる時期なのに、再就職もままならない時代でしたので本当に悩みました。それより、私はその会社を誰よりも愛していただけに苦しみました。何も当てなく辞めてしまったことを悔やみ、もう一度帰って来いと言ってくれないかと弱気になったこともありました。二つ目は、起業してやっと軌道に乗りかけたかな、という大切な時、販売員の造反があり、売り上げがゼロ近くになってしまったことです。

運が悪い時は続くもので、日本から仕入れしていた買掛金が、急な円高により倍近くになってしまいました。もう万事休すかと思いましたが「捨てる神あれば拾う神あり」本当に良く乗り越えれたと思っています。多くの方々から暖かい手を差し伸べて頂いたおかげです。感謝の一言以外ありません。

まだ人生が終わったわけではありませんが、悔いが残ると言えば、やはりいつも「勇気」が欠けていたと反省しています。誰にもチャンスは訪れる筈です。そうした好機に、保身でそれを逃がしてしまうことが多いような気がします。私にもそうした好機は何度か訪れましたが、その時、やらなかったことを後悔しています。ですから、佐々木投手のことが気になってしまいました。実際、今のプロ野球を見ていて何か物足りなさを感じるのは、管理野球が主流になっているからではないでしょうか？　現に大リーグの球場に足を運ぶ人が年々減ってきていま

す。勿論、これは私の個人的意見で、大勢は登板回避が正解でしょう。嫌われても言うべきことは声を大にして云うべきだと私は思っています。また、異なった意見を袋叩きにするのも良くありません。先日、日本で開催されたラクビーの男らしい清々しさには心から感動しました。プロのサッカーでは一点取っただけで喜びを爆発させて抱き合うのは、個人的にはいただけません。ラグビーは男のスポーツを感じます。男が弱くなってきているだけに余計に感じます。

## 《世の中これでいいのか》

時々考えることがあります。今の世の中、これで良いのだろうかと・・・。今のシニアは、余りにも伝統を無視したり、西欧かぶれの人が多過ぎると思います。賢人は歴史から学ぶといいます。良いものはやはり残すべきであり、今のトレンドに迎合するだけが能ではありません。

今後どんどん進むテクノロジー万能時代には到底馴染むことは出来ないと、皆嘆いています。そんな時、落合陽一さんの「日本再興戦略」という本を読む機会がありました。32歳という青年が、日本の行くべき道しるべを明確に顕してあり、実に驚きました。私のようなテクノロジー音痴にはついて行けない部分が殆どですが、彼のような若い青年が日本再興を真剣に考えていることに、日本はまだまだ再興のチャンスがあると確信しました。

## 《 行動するシニア 》

私は、行動するシニアを標榜して実践して行こうと思っています。自分の健康管理を良くすることも日本再興の一助になると思っています。超高齢化はストップできない以上、健康であることは義務でもあると思います。国の医療制度に自分の健康管理を委ねるのでなく、生活習慣をちょっと改善するだけ見違えるほど健康になります、

昨年の9月にはカリフォルニアの海岸で、10月は東京の井之頭公園で友人達と一緒にゴミ拾いを行ないました。両所ともゴミが少ないのに驚きました。大変素晴らしいことです。ゴミ拾い後のビールの美味しさは格別でした。久し振りに心から笑みが溢れているのが自分で分かりました。これからどのようにこの運動を継続展開していくかを考えなければいけません。

## 『後日談』

妻から何も遠くまで行ってゴミ拾いするのではなく、家の周りをやってほしいと言われました。全くその通りですが、これは男性と女性の考え方の違いだと思います。女性の考え方の方が現実的なのでしょう。ゴミ拾い運動の目的は惰眠を貪っているシニアに「カツ！」を入れることに意味があるのです。私もそのひとりです。

## 僕の本棚

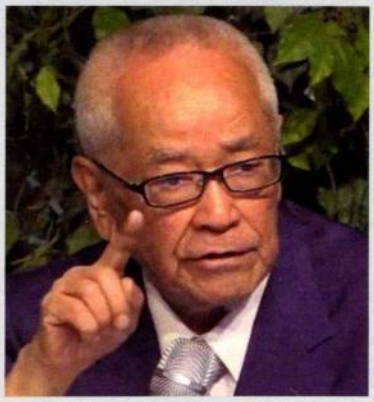
**若者が頑張っているぞ、シニアの私たちも頑張ろう！**

**「日本進化論」　落合陽一著　SB新書**

新進気鋭の社会学者が書いた本。現代は混沌とした時代で生きにくい時代と言われています。著者は、そうした悲観論に与さず、チャンスと捉えるべきと説いています。著者はまだ２０代後半の青年で、今の「欲なし、夢無し、やる気なし」の日本の若者に警鐘を鳴らしています。確かに、これからの時代どうなっていくだろうかと考えると悲観的になる要素が強すぎます。しかし、悲観に浸るより自ずから積極的に行動に移すことが良いに決まっています。ＡＩによって今の職業の半分以上が取って代わります。その結果、弱肉強食になるのか、又は人間がそれなりに進化するのか、この本を読んだだけではわかりません。しかし、これからのトレンドを知るために読んでおくべきと思いました。科学の進歩は永遠に続くのか？そして、それは本当に必要なのか？　考えさせられる本書の内容でした。

# ジャーナリストの目

## チャランポランな記者人生
## 社会の木鐸、１％の正義感



ジャーナリスト
**北岡和義**

**１９４１年岐阜県生まれ、南山大学卒。読売新聞記者、国会議員秘書を経てフリー ジャーナリスト。１９７９年渡米。ロサンゼルスで邦人向け放送局「JATV」を設立。２００６年帰国し、２０１６年迄日本大学国際関係学部特任教授。著書に『１３人目の目撃者』『海外から１票を～在外投票運動の航跡』『政治家の人間力』など。**

新聞記者は野次馬をプロにしたようなもの。火事や交通事故、殺人事件が発生すれば記者は「それっ！」と現場にすっ飛んでゆく。

ある汚職事件に巻き込まれた北海道大学事務局職員の娘から「あんたは職業意識に徹したオニ、人間じゃあない」と罵られたこともある。事情聴取を受けているやくざの親分から「記者さんは怖いね」と言われた。

５歳の女の子が自宅の庭でバックしてきた父親運転のダンプに曳かれてせんべいのようになって死んだ残酷な事故だった。娘さんの写真を借りに地獄に突き落とされた家庭を訪ねた。「帰れ！」と怒鳴られた。写真は借りられなかったが、デスクは怒らなかった。

そうした苛酷な現場を取材するとき、記者である自分が惨めで恨めしくなる。

１９６６（昭和４１）年ドカ雪の深夜、車にはねられた小学校１年、７つの女の子、岩崎紀恵子ちゃんが交通事故で病院をグルグルたらい周しに回され死んだ。お母さんが可愛い写真を奥から持ってきて「使ってやってください、最後ですから。二度とこんな事故が起こらないように」と泣きながら。

「円山動物園にチンチラの赤ちゃん誕生」とか「象さん、北国に死す」とかのほんのり温かい記事も忘れられない。小学校の恩師に記事を送ったらとても喜んでくれた。

### 学生時代

「ちゃらんぽらん」を広辞苑で確かめたら「うわついてて、いい加減なこと」とある。そう言えばいい加減な連中が多かったなあ、とＬＡを思い出した。

送られてきた創刊準備号を読んだ。「人生を終えようとしている同世代の高齢者仲間が暇に任せて、なにかしたいという真面目な欲求」だろう。でもちゃらんぽらんであってはいけない。そう思いながら自分の記者人生を振り返ってみる。

やはりいい加減な人生だった。

もともと学校の教員というお堅い職業につきたい、と教育学科を選んだ。三重大学の学芸学部を受け合格した。前身は教員養成所ともいうべき師範学校。ところが「師範学校じゃあ、つまらなねえ」と不遜にも考えを変え、南山大学に進学した。

卒業期になって国語教師の資格の取得単位が足らない。４年生前期に発覚したこの事態に頭を抱えた。留年してもう一年やり直すか、それとも働きながら定時制で学び、必要単位を上乗せ取得するか。ゼミの直井豊教授が早稲田大学の職員のポストをコネで探してくれた。

沼澤喜市学長が気にしていると就職部長に呼び出された。「早くあいつを叩き出せ」と命令されたそうだ。学長直々のお達し、ぼくも大物になったものだ。

なにしろ南山という大学は超コ

ンサーバティヴで、ハイカラーの黒い神父服で固めたドイツ人教師が数多くいた。教師の3分の1が外国人で、しかも反共の砦のような雰囲気だった。その保守色濃い学園でリベラルをテーマに大学祭を企画したのだから大学側が神経を尖らせた。

入学したての1年生の春、60年安保闘争があった。ぼくは「南山大学学生自治会」の旗の下にデモした。大学からクレームがついた。「学生には賛成する者もいる」という。旗を「南山学生有志会」に切り替え、でかい機動隊員に挟まれて広小路通りをデモした。名古屋の田舎の小さな大学だが目立った。南山生も反対している。

「マスコミなんて面白いかもね、先生」

ふと思いつくままに口に出した。就職部長は驚いたように「おっ！それがいい。君のような人間はマスコミがぴったりだ」

かくして毎日、日経、産経、日刊工業新聞と入社試験を受け、日刊工業新聞は合格した。後日、読売も補欠で採用が決まった。ぼくの人生を決定付けた瞬間だった。

## 記者人生のはじまり

〝鬼の千葉学校〟と言われた読売新聞千葉支局に配属された。関東はどこも読売の金城湯池、販売部数で圧倒していた。

しかしとんでもない会社で新人は蕎麦屋の二階に雑魚寝させて24時間こき使う。ぼくらは「タコ部屋」と呼んでいた。冗談じゃあねえ。自分でアパートを探し1か月足らずでぼく一人だけタコ部屋を抜け出した。

その年12月、木更津通信部へ異動を命じられた。

当時、読売には編集局記者と地方部記者の2段階で新聞記者を採用していた。地方に行きたがらない若い記者を入社段階から地方支局・通信部要員として採用し、全国に配った。ぼく以外誰もいない記者一人の職場。木更津は千葉県でも市川や船橋に比べると「死んだはずだよ、お富さん♪～」なんて呑気に芸者と歌って遊んでいた。タヌキの証城寺で有名な内房州の小規模の漁師町だ。

22歳で記者となった若造のぼくに警察署長や市長は「読売さん」と社名で呼び、名前を覚えてもらえなかった。若くても読売の代表だから強面（コワモテ）する。たまに千葉支局から原稿や取材の手配がきたりするだけで、後は自由気ままにして文句を言われない。

これじゃオレはスポイルされるな。そう思った。鍛えてくれる人がいない。

春になると形式的に本社の人事部が希望の職場をアンケート様式で訊いてくる。翌春、その紙が届いた。

輪転機が回っているところへ行きたい。本社社会部や政治部は無理でも「北海道支社編集部」ならどうか。ぼくは第三希望にそう書いて提出した。

すぐ人事部長から田久保耕平支局長に連絡がきた。田久保支局長は「本当に北海道を希望したのか。嫌なら断ってやるよ」という。「いえ、行きます。行きます。真面目に希望したのですから」

こうして入社1年4か月にして未知の北海道へ転勤となった。初めて青函連絡船に乗り津軽海峡を越えた。太宰治が書いたように「北海道には大陸の匂い」がした。

## 北海道支社編集部

渡辺文太郎支社長、小野顕編集部長、酒井昌邦報道課長以下デスク入れて約20人、旭川・小樽・函館・根室・北見・岩見沢にそれぞれ支局があり、稚内・網走・倶知安・苫小牧・滝川などの通信部があった。編集部だけで総勢50人くらいの大世帯である。整理部、写真部、機報部、他に校正記者もいた。1階が輪転機、2階が組版のテーブルがあって文選、植字、活版部門など日刊紙の体制はきちんと整っていた。

未明の1時40分が締切時間。紙面が組みあがると早朝向けて輪転機がガタガタ回った。インクの匂いのする刷り上がりの新聞を読む。充実した至福観が深夜の社内に広がった。

青春記者だった札幌時代がなんと言っても懐かしい。ちゃらんぽらんな記者だったが、新聞記者は社会の木鐸、1％の正義感は胸の奥底に潜ませていたつもりである。

そこへ飛び込んできたのが日本初の心臓移植という超ビッグニュースだった。

（次号へつづく）

# 書籍紹介

## 私のおすすめはこの本

### 『鼻・蜘蛛の糸・芋粥・偸盗』

芥川龍之介　（岩波文庫）

長い鼻を持つ禅智内供の内心の葛藤「鼻」、芋粥に異常な執着を持つ男「芋粥」、 お釈迦様が垂らした蜘蛛の糸。どれも人間の本質をついていて、悩んだり、行き詰った時に読むと救われる本です。（鳥居）

### 『夜と霧』

ヴィクトール・フランクル
翻訳：池田香代子（みすず書房）

私達は苦悩は不幸であり、死は敗北であると捉えがちですが、ナチス・ドイツの強制収容所で絶望の日々の中でも最後まで希望を失わなかった心理学者の彼は「苦悩と死があってこそ、人間という存在は初めて完成する」と前向きに捉えています。他の多くの言葉と共に勇気を与えて呉れる不朽の名著です。（鶴亀）

### 『仰臥漫録 』

正岡子規　（岩波文庫）

死の前年から死の直前まで綴った子規の病牀日録。病人でありながら、記述されている子規のの食欲のすごさに驚きます。
生きる活力をもらえる本です。（鳥居）

### 『男はつらいよ寅さんの歩いた日本』

山田洋二（近畿日本ツーリスト）

２０１９年、寅さん誕生５０周年で新作映画が公開されましたが、寅さんと共に懐かしい日本の風景を楽しめる一冊。（佐伯）

### 『死にざま 生きざま－美しき人になりたく候』

紀野一義（PHP研究所）

「真に美しい人とは、死にざまの美しい人である。その人の容姿の美醜がどうであれ、また、生き方の器用、不器用がどうであれ、最も大切なことは、その人がいかに私心を捨て、虚飾なく自分の人生を全うしたかにある」と語り、何人かの先達の姿を伝えています。（鶴亀）

### 『脳のからくり』

竹内薫、茂木健一郎
（新潮社）

サイエンス・ライターと脳科学者がタッグを組んで、脳の構造をユニークに、又とても分かりやすく説明。「なるほど」と頷ける内容満載。
（北村）

### 『一切なりゆき－樹木希林のことば』

樹木希林　（文春新書）

「自分勝手がいちばんいいんじゃない？」とちゃらんぽらんの会の趣旨にも繋がるような、既成の常識や縛りにとらわれず、自分なりに誠実に、正直に生き抜いた彼女の真実の言葉が心に響きます。死後に出版され、１３０万部を突破したという、特に中高年の女性に大人気の本です。チャランポランの会の本棚に置いてあります。（鶴亀）

# 素敵な人見つけた

Vol. 3

マドリッド、スペインにて

## 中村 恭子 83歳

**今の夢は生きることの大切さを伝えられるミュージカルを上演すること。**

1936年の雛祭りの日に産声をあげ、学生時代はバレーボールの練習に明け暮れる日々。しかし、宝塚の公演を観た日から世界は一変。バレーボールからバレエへと練習の対象が変わり、高校卒業後、日劇ダンサーに。初舞台は帝国劇場。恭子さん18歳の時でした。

そしてラスベガス公演「Holiday In Japan」のオーディションに挑戦。会場では伴奏者が奏でるTea for Two のピアノの音に合わせ、振付師がちょっと踊ったのを瞬時に真似て踊る。恭子さんも必死で挑みました。その結果、見事合格。

しかし、米国行きは1ヶ月間。着物持参。金銭的な不安から素直に喜べなかった恭子さんにお母様が「あなたは世界で活躍できる人。夢を持って生きなさい」と笑顔で背中を押してくれたのです。そして迎えたラスベガスでの公演初日。ナットキングコールなどの有名なスターが自家用機でこの公演にかけつけ、1ヶ月の契約が初日で3ヶ月へと延長決定。当時の日本では考えられないものばかりのラスベガスで、日本の〝ギョール（Girl）〟が来ていると言って、サンフランシスコから日本人の方がお米やお味噌など、沢山持ってきてくれたりもしたそうです。この米国での体験を恭子さんはいつも手紙にしたためお母様に送っていました。

恭子さんのお母様はハイカラさんで、大学の先生をしていたお父様と趣味の社交ダンスがきっかけで恋に落ちて結婚。しかし、お父様は恭子さんの顔を見ることなく、病気で他界。タイピストとして女手ひとつで娘を育てる母の帰りを、恭子さんは幼いながら水団を作り、雨の日は傘を持って駅まで迎えに行き、電車が停まる度に母の姿を探していたそうです。

お母様からもらった「夢を諦めずに突き進みなさい。ただ、人には迷惑をかけないように。責任を持ってやりたいことをやりなさい」という言葉を胸に、エンターテイナーとして、また起業家、そして母として歩んでこられました。「77歳で他界した母のその年を超えました。いただいた命を粗末にしないで、やればなんでもできる。知り合った人達やその家族の皆さんにも、感謝を伝えながら生きていきたい。」と話す恭子さん。

一人で渡米してから62年。今では母の日に13人の家族の笑顔が恭子さんの周りを囲みます。娘さんとお孫さんと一緒に3世代でビジネスを行いつつ、世界を飛び回りステージにも立ち続ける恭子さん。夢の実現も近そうです。

— 特集 —

## 加州の大地に生きた日本人

# 先達への敬意と感謝

鶴亀　彰（つるかめ　あきら）

1941年鹿児島県生まれ。鹿児島ラ・サール高校を経て、京都外国語大学を卒業。1964年に旅行会社に入社。1966年、同社の米国オフィスへ駐在として渡米。1980年にロサンゼルスでカリフォルニア・コーディネーターズ社を設立。日本から北米とメキシコに進出する企業の現地における支援や米国企業の日本市場進出に協力。現在、ロサンゼルス郊外、ロミタ市在住。著書に「伊一六六潜水艦 鎮魂の絆」「日英蘭 奇跡の出会い—海に眠る父を求めて」学習研究社がある。

二十数年も前ですが、三週間に渡り、西部太平洋州（カリフォルニアを含め十州）のドライブ旅行を妻と二人でしました。

カリフォルニア州、サウスベイの我が家を出発し、フリーウェイ15号線をネバダ州、ユタ州、アイダホ州、モンタナ州と北上しましたが、途中、グランドキャニオンやモニュメントバレー、コロラドスプリングスやイエローストーンなどを訪れるため、一時15号線を外れ、アリゾナ州やコロラド州、ワイオミング州なども訪れました。

その旅では、各地で日本人のよすがに多く触れました。立ち寄ったスーパーにはJapanese Eggplantとか Daikon Radishなどのラベルが付いた野菜が各地にありました。地元の日系人経営の農家から仕入れているそうです。ユタ州やコロラド州で泊まったモテルではオーナーが「貴方たちは日本人か」と聞き、「そうだ」と答えると、その地で活躍している日系人家族のことを話す例が三度もありました

### 各地で強く生き抜いた日系一世

戦前のことですが、アイダホ州には約二千人、モンタナ州には約五千人の日本人が住んでいたそうです。モンタナ州では同州の発展に貢献した人々を称えるMontana Cowboy Hall Of Fame & Western Heritage Centerと言う殿堂がありました。

大分県出身の堀本太郎（ほりもくたろう）は、1898年に渡米し、ハウスボーイから始め、後にホテルやレストランや不動産ビジネスで大成功したのですが、惜しみなく、地元のために大きな貢献をした素晴らしい日本人で、モンタナ州では今も讃えられています。いつか機会があれば、また「かわら版」で彼のことをご紹介させて頂きたいと思います。「かわら版」第1号ではワシントン州ワパトで不毛の荒地を豊かな土地に変えた二千人余りの日本人のことを書きましたが、ネバダ、アリゾナ、ユタ、コロラド、アイダホ、ワイオミング、モンタナ、ワシントン、オレゴン、全ての州で、戦前の日本人に対する激しい偏見や差別に耐え、強く、逞しく生き抜いた日本人一世と二世の歴史に触れることが出来ました。

1880年頃から1900年代初めに掛けて、ハワイから米本土に移住した一世達はシアトル港やサンフランシスコ港、年代が下がるとロサンゼルス港に上陸したために、ワシントン州やオレゴン州、カリフォルニア州にはより多くの日本人の活躍の歴史がありました。そこには多くの地で特に農業の分野で米

国に大きな貢献をした日本人先達の活躍の跡がありました。

私と妻はこの三週間の旅で、先達の苦闘と成功に心からの敬意を感じました。各州での日系人の歴史は現在も各地に記録され残っています。それを全部お伝えするには紙面が足りませんので、今回はカリフォルニア州だけに絞り、お話させて頂きたいと思います。

1900～01年頃の写真。モンタナ州内らしい。当時の日本人労働者はアームスリーブを用いていた（シアトル・花田まつさん提供）

『北米百年桜』に掲載される日系移民初期のモンタナの写真（写真提供：高橋進）ディスカバー・日経より

# カリフォルニア州でキングと呼ばれた三人の日本人農園主

## ポテトキング 牛島謹爾

オレゴン州からカリフォルニア州に入った5号線は首都のサクラメントを通り過ぎ、ストックトン（stockton）まで南下します。ストックトンはカリフォルニア州中部に広がるサンフォアキンバレー（San Joaquin Valley）と言う大平原の北の中心地です。サンフランシスコからは約80マイル程東に位置します。牛島が6万エーカーを越す大農園を築いたのはこの地でした。

牛島謹爾（うしじま きんじ）は1864年に福岡県で生まれ、1888年、21歳の時に渡米しました。最初はサンフランシスコの米人家庭で働きながら、英語を学び、その後、ストックトンに入り、白人農家が眼もくれない、不毛の荒地を耕し、悪戦苦闘しながらも、ジャガイモ生産に励みました。その努力は報われ、大量生産された高品質の彼の農園のジャガイモは全米中に送られました。ウィキペディアの記録によると彼の農園の生産量はカリフォルニア州中のそれの5割、全米中のそれの1割に達したそうです。

彼は1926年、62歳でロサンゼルスで脳溢血で亡くなりました。日本への帰国の途中でした。

## ライスキング 国府田敬三

5号線を更に南下するとサンフォアキンリバー（San Joaquin River）に添ったサウスドスパロス（South Dos Palos）と言うマデラ郡の小さなコミュニティがあります。現在でも人口は二千人に満たない農園地帯です。

### 《25歳で渡米》

国府田敬三（こうだ けいぞう）は1882年に福島県で生まれました。子供の頃、近くにアメリカ帰りの人が住んでおり、その小父さんからロックフェラーやカーネギーなどの米国実業界の成功物語が描かれた「米国富豪伝」と言う本を見せて貰い、夢中になって読んだそうです。そして渡米の夢が彼の胸で大きく膨らみました。しかし、その夢は両親の大反対に会

い、なかなか実現せず、地元で学校の先生になりました。彼は両親に教育研修の目的での渡米だと説明し、１９０７年にサンフランシスコに到着しました。彼が２５歳の時でした。それから多くの小さい成功や大きな挫折を経験しました。「ブランケ担ぎ」と当時呼ばれた、ブランケ（毛布）を担いで農園から農園を回る季節労務者などを経験したり、サンペドロのターミナルアイランドでマグロの缶詰会社を立ち上げたりしたそうです。そして最終的に落ち着いたのがサウスドスパロスでした。彼はそこで米作りを始めました。もともと彼の福島の生家は米農家だったそうです。

### 《 加州でコメ作り 》

カリフォルニアの気候に合う米作りに悪戦苦闘する中で、飛行機で種蒔きする、実にアメリカ的な生産方法を生み出し、「ライスキング」と呼ばれる存在になりました。しかし、その成功までには一口に言えない様々な障害がありました。一つの障害は当時日本人には土地の所有が認められないことでした。彼は二世の息子を土地の持ち主として登録しました。最大の障害は真珠湾攻撃でした。事業は即座に終了すると共に、彼も息子たちも全員が強制収容所に入れられました。しかし、彼はこれらの障害にもめげず、戦後は更に大きな米作りに成功しました。

国府田は１９６４年、日本に一時帰国中に脳卒中により死去しました。８２歳でした。しかし、彼が築いた「国府田農園」は息子や孫に引き継がれ、現在でも「国宝ローズ」と言う日本米に負けない、美味しいお米を私達に提供し続けています。

## レタスキング
## 南弥右衛門

５号線をベーカスフィールド（Bakersfield）辺りまで南下し、そこからはフリーウエイ１６６号線を西に走ります。

南弥右衛門（みなみ やうえもん）は１８７９年に和歌山県で生まれました。渡米したのは１９０５年です。２６歳の時でした。和歌山には渡米経験者が多く、米国は比較的身近に感じられました。南はまずハワイに入りました。そしてその後、サンフランシスコに移りました。そこからサンタマリア平原のグアダルーペに入り、最初は地元の米国人が経営するテンサイ農園で労働者として働きました。

彼が活躍したのはグアダルーペ（Guadalupe）と言う太平洋岸の土地です。サンタバーバラ郡になります。

### 《 レタス栽培の始まり 》

南が農園経営者になったのは１２年後の１９１７年です。レタスの栽培を始めました。レタスはアメリカ人の食卓に欠かせないものです。サラダに、サンドイッチにと毎日広く食されます。レタス以外にもカリフラワーやセロリなどの栽培も試しましたが、着々と伸びて行ったのはレタス栽培でした。

１９２９年には息子と一緒に「南父子農業協会」を設立し、業績はますます拡大・上昇しました。彼らが生産するレタスは品質も優れ、カリフォルニア州だけでなく全米中に販売されました。しかし、南も１９４１年に始まった日米戦争のため、ビジネスは全て終わり、強制収容所での日々を過ごしました。彼も牛島や国府田などと同じように不屈の魂を持った日本人でした。

太平洋戦争が終わった翌年、１９４６年にまた小さい農園からビジネスを再開し、息子の弥太郎と共にレタス栽培を拡大しました。一日三時間の睡眠で日夜頑張り、地元では「ナポレオン」と言うニックネームが付いたそうです。南弥右衛門は１９７３年、９３歳で亡くなりました。

# 地元で貢献した日系人

## 野菜栽培で成功 荒谷節夫

広島県出身の一世の荒谷節夫（あらたに せつお）も野菜栽培で大成功しましたが、彼には面白いエピソードがあります。日露戦争の最中に一兵士として参加していた荒谷に突然米国雄飛の考えが浮かんだそうです。サンフランシスコ上陸の後、ガーデナ市に転居し、またその後、農産物栽培の土地としてのサンタマリア平原の可能性に眼を付け、グアダルーペに転住したそうです。

### 《 日米野球交流 》

1931年7月26日付けの大阪朝日新聞の記事によると、彼は野球が大好きでした。自分の会社で働いていた日本人従業員で野球チームを作り、1928年には日本遠征もしたそうです。その後、日本からも野球チームがガダルーペを何度も訪問し、日本人同士による日米野球交流が続いたそうです。

## ジョージ荒谷

彼にはガーデナ市在住時代に生まれた荒谷哲夫と言う息子がいました。米国名はジョージです。ジョージ・アラタニさんはロサンゼルスの日系社会では誰一人知らない人はない位の方でした。リトルトーキョーにある劇場は彼の名前を取り、「アラタニ・シアター」と呼ばれています。彼は「ミカサ陶器」や「ケンウッド・エレクトロニクス」などで大成功した実業家でしたが、2013年に95歳で亡くなりました。彼が残した「アラタニ財団」は彼の死後も日系社会のために多大な貢献を果たし続けています。

## 見渡す限りイチゴ畑

グアダルーペから今度は太平洋岸を走る1号線を下ると、オックスナードが出て来ます。この地でも多くの日本人一世がイチゴ栽培で成功しました。イチゴは日本人農家が得意とした果物で、ガーデナやトーランス、そしてオレンジ・カウンティでも多くの日本人により好んで生産されました。

トーランスのTorrance Blvd.とHawthorne Avenueの近くにDouble Tree by Hilton Hotelがあります。このホテルの最上階は宴会場になっているのですが、そこからは広くトーランスやガーデナやパロスベルデス半島の景色が一望に見渡せます。その昔、多くの日本人一世がイチゴ栽培に従事した畑があった土地です。宴会場の壁にはこのホテルが建設される前にこの土地でイチゴ農園を広く経営していた日本人農家の写真が長く飾られていました。

またホンダやトヨタの建物の場所もその昔は日本人一世が経営するイチゴ畑だったそうです。トーランスの隣のガーデナ市はガーデナ平原にあったガーデナ、モネタ、ストロベリーパークと呼ばれた三つのコミュニティが1930年に統合して現在のガーデナ市になりました。ここでも多くの日本人がイチゴ農園を持っていました。当時22の日本人経営のイチゴ農園があり、毎年5月には「The Strawberry Day Festival and Parades」が開催され、近隣の人々の人気を呼んだそうです。当時あった「モネタ日本語学校」の建物は現在では「Gardena Valley Japanese Cultural Institute」として使われています。

トーランスやガーデナだけでなく、オレンジ郡やサンディエ

ゴ郡でも多くの日本人が開拓した農地がありました。戦後の都市化の動きのため、それらの農地の多くは住宅用地や空港用地などに変わりましたが、今でもインペリアルバレーなどには二世や三世が引き継いだ農園が残っています。

## 勤勉、正直、公共心

私は大変な苦難にも負けず、カリフォルニアの大地で生き抜き、成功した日本人一世や二世に心からの敬意を覚えるのですが、事業成功以上に尊敬しているのは彼らの生き様です。多くの人々が成功の果実を自分や家族だけのものにせず、日系社会のみならず、地元の社会に分け与えた心の広さです。

私は昔、トーランス市役所のために日本人農園主からの土地買収を交渉した弁護士から、「日本人農園主達は全員が正直で、心が広く、市の発展のためになるのであればと、市役所の言い値で土地を売ってくれ、本当に感動した」と聞いたことがあります。第二次世界大戦で大変な犠牲を払いながら、米国の勝利に身を捧げた二世兵士の貢献と共に、一世の日本人たちの勤勉さ、正直さ、公共心が米国社会の日本人への態度を大きく変えたと言われています。前述の牛島、国府田、南の三人のキング達も日系社会のみならず地元の米国社会への貢献は多大で、今日でも尊敬されています。

## 先達の努力

戦後渡米して来た私達がこのカリフォルニアの大地で伸び伸びと自由に生活出来るのはこれらの先達の努力のお陰だと思います。また私達が今日家や土地を購入出来たり、市民権を獲得したり出来るのも一世や二世達が法律改正に成功してくれたお陰です。

マイク正岡

藤井整

写真：加州毎日、JA Circle

## 法律改正に尽力した一世、二世

1913年にカリフォルニア州で制定された日本人の土地所有を禁じた「外国人土地所有禁止法」を米国憲法違反だとして4年間の法廷闘争の後、1952年に廃案に追い込んだ一世の藤井整や1924年に連邦議会で制定された、いわゆる「排日移民法」を改正し、1952年から日本人の移民や帰化が許されるようになったのも、二世のマイク正岡や一世達のにじむような努力のお陰でした。米国議会や大統領に働き掛け続けたのがマイク・マサオカを代表とする二世達であり、彼らの活動を資金的に支えたのが前述の国府田敬三を始めとする一世達でした。収容所から戻ったばかりでまだ住む家も決まらない一世達は当時のお金で64万ドル余りの浄財を集めたそうです。現在のお金ではどれだけになるでしょうか。彼らへの感謝の思いは尽きません。

## 陰で支えた女性たち

### 献身的な妻たち

私が勉強した加州の大地で活躍した日本人一世の記録には男性しか出て来ませんが、私は彼らの陰で頑張り支えた女性達の素晴らしさを感じています。モンタナの堀杢太郎、カリフォルニアの牛島謹爾、国府田敬三、南弥右衛門、荒谷節夫などの陰にはそれぞれ素晴らしい献身的で頑張り屋の奥さんがいました。彼女らは夫と共に畑で働き、そして子供を育てました。

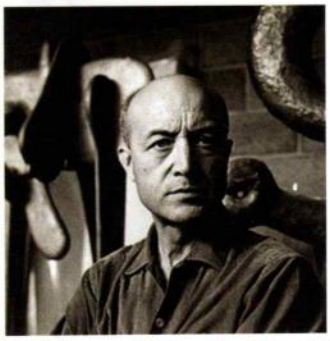
### 写真結婚

当時経済的に余裕のあった人は帰国し、日本で結婚相手を探したそうですが、一般の人々にはそれは出来ませんでした。そこで生まれたのが写真結婚でした。米国の記録によると、1907年から1923年の16年

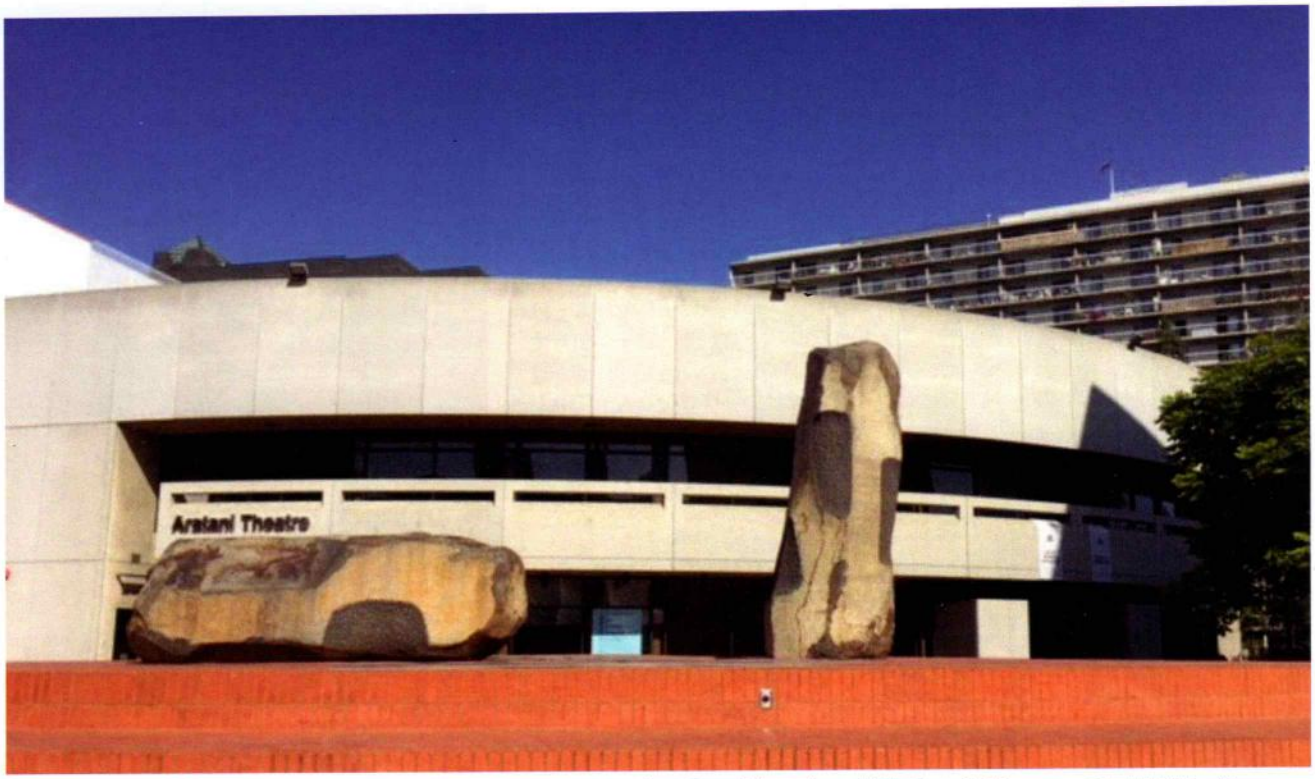
間に2万3千人の日本人花嫁が入国したそうです。そして1920年の統計では当時約3万人の二世が生まれていたとあります。そして、それらの二世の多くが442部隊として、欧州で戦い、MIS (Military Intelligence Service) として太平洋戦線で活躍しました。

## 石の彫刻 イサムノグチ

リトルトーキョーの「日米文化会館」の前庭に「アラタニ・シアター」を背景に石の彫刻があります。イサム・ノグチの彫刻です。一つの石はどっしりと上を向いて立ち、もう一つの石は静かに横たわっています。イサム・ノグチはこの彫刻を「To The Issei」と題し、一世パイオニア達への尊敬と愛情を表現しました。彼の父親は愛媛県出身の一世でした。母親は米国人の女性でした。渡米した一世の中にはこの記事に述べたように多くの成功者もいました。そして彼らの子孫は二世、三世、四世、五世、六世として米国の大地に強く根を張っています。しかし、その一方、夢破れ、日々の生活にも困窮し、妻を娶ることもなく、不遇を嘆きながら生き、そして最後には敗残の身のまま死を迎えた一世もいました。ひょっとしたら、数としてはそちらの方が多かったでしょう。彼らは今では米国の土となっています。しかし、この二つの石は水の流れで結ばれています。その水の流れはこの世での一時的な評価を越えた、人類普遍の勇気と連帯を象徴しています。立った石も横たわった石も、百年以上も前から、広大な太平洋を越え、米国での生活に挑戦した勇気と覚悟という点で同じであると、イサム・ノグチは敬意と感謝を込めて伝えているのかも知れません。



イサム・ノグチのポートレイト
©The Isamu Noguchi Foundation and Garden Museum, New York / Artist Rights Society [ARS] – JASPAR. Photo by Jack Mitchell.




立っている石が成功した一世移民、横になっている石が不遇に終わった一世移民を象徴。二つの石は流れる水で結び付けられており、財政的成功や失敗を越えて、両者に共通する「未知の土地へ挑戦した勇気」を称える「To The Issei」と題した彫刻。

# ひなたぼっこ

鶴亀　彰

最近、ひなたぼっこを楽しんでいます。カリフォルニアの陽光は強く、夏は日焼けしてしまいますが、さすがに冬から春の太陽はうららです。今から考えると何であんなにいろいろ走り回り忙しくしていたのかと不思議な位、仕事に追われていた頃は、まるで首を切られた鶏のようにバタバタしていました。それが仕事を止めた後、お金は入らなくなりましたが、その反面、時間だけは充分にあります。毎日が日曜日です。その中で楽しさを発見したのがひなたぼっこです。何といってもどこかに出掛ける必要はなく、気分が乗れば、いつでもすぐに出来ます。まず第一、お金が掛かりません。

## 《モチとひなたぼっこ》

私は現在は執筆活動を中心にしており、外に出掛けるのはいくつかの勉強会や図書館などだけです。ちょっと疲れたら、一休みとばかり、午前中でも午後でも、庭に出てひなたぼっこしています。どちらかというと裏庭の方が多いです。椅子に座り、何をするでもなし、庭の風景などを眺めながら、静かに太陽の温かさを感じます。我が家にはモチという名の雌犬が居候しています。この犬は我が家に居候している妻の弟が飼っている犬です。義弟が近くの高校で先生として教えている時間は妻が世話し、散歩などに連れて行っていますが、私のひなたぼっこの時は一緒に私の足元でひなたぼっこします。

普通、ひなたぼっこの時間は短い時で15分、長い時で30分です。私に合わせ、モチも私が部屋に戻ると、一緒に戻ります。私は犬猫のことは詳しくないのですが、モチはプードルとマルチーズが交配された、比較的小さい犬です。ひなたぼっこの間、彼女が何を考えているのか分かりませんが、世は事も無しといった風情でゆったりと横になっています。人間の私も特に何かを考えるではなし、庭の木や草花などをぼんやりと眺めています。たまに頭に浮かんだ雑念を思い返していると、コンマリさんの整理術ではありませんが、何だか頭が整理されるようで気持ちが落ち着きます。

## 《ひなたぼっこの恩恵》

しかし、ひなたぼっこの最大の恩恵は今まで気づかなかった身の回りの自然の面白さや豊かさに触れることです。燦々と、しかし柔らかく降る太陽の光や静かにそよぐ風を感じ、心がリラックスすることです。緑の中に赤いバラやブーゲンビリヤやハイビスカスの花を見つけると、何か得した感じになります。先日は白いユリの美しさにしばし見とれました。忙しい時代にはかってなかったことです。我が家の裏庭には一本の柿の木があるのですが、昨年の秋もいっぱい大きい実をつけて呉れました。妻が十年余り前にホームデポで買って来た鉢植えの柿の木でした。

我が家では食べ切れず、ご近所さんや友達にお裾分けし、それでも残りました。リスや鳥もご相伴に預かりました。緑だった葉っぱはすっかり赤や黄色になり、風が時折吹くたびにハラハラと地面に舞い降りていましたが、今はもうすっかり裸です。それにしても思うのですが、肥料は一切上げていません。水も芝生に撒く際についでにちょっと上げますが、いつもサボっています。それなのに何の

文句も言わず、毎年毎年秋には１００個余りの大きいみごとな実を付けます。太陽の光と土地の養分だけで立派に育っています。本当に凄いもんだと感心します。

## 《　庭からの風景　》

気分によっては裏ではなく表の庭に出ます。花壇のレンガの上に腰を下ろし、通る車や人の姿を眺めるともなく眺めています。たまにはウォーキングしている人と会釈をすることもあります。足元を蟻の行列が忙しく動いている時があります。「大変だね、ご苦労さん」と声を掛けながら、じっと見ています。ハチドリが軒先に架かっている水を飲みに来ました。この鳥の空中停止から超スピードで飛ぶ姿はいつ見ても感心します。ある時はブルージェイの巣を襲おうとしたカラスをその五分の一の大きさもない母鳥が追い払っていました。子を必死に守る母鳥の気迫にカラスも怖れをなしたようです。

道路の向う側の歩道に二本の大きな街路樹が立っています。一本は常緑樹なのか、年中緑です。もう一方は落葉樹で、一年の内に灰色の裸から豊かな緑へ、そして紅葉へ、そしてまた裸になります。これを毎年、飽きることもなく、文句を言うこともなく、四季に合わせ、繰り返しています。樹木の名前に疎い私は、もう四十年も見ているのに、その名前を知りません。名前は知らないものの、最近ではすっかり身内の感覚です。いつか私が死んだ後も、この二本の木は妻や息子を見守って呉れるよう、その内にお願いしようと思っています。

## 《　至福の時　》

ヘレン・ケラーの言葉に「毎日わずかの時間で良いから、恍惚の時間を持ちなさい」というのがあるそうです。日常の雑務や心配をしばし離れ、心が落ち着く至福の時を持ちなさいということなのかなと思います。ひょっとしたら、最近始めた私のひなたぼっこはその恍惚の時間に近いのかも知れません。少なくともその時間は不安や心配などはしばし忘れ、自然の豊かさと一体化しています。恍惚の時間とは草花の美しさや夕焼けの美しさなど自然の美しさの中に身を置くときに感じられるのかも知れません。お金や損得、文明の便利さや快適さではない、誰にも平等に与えられる自然の恵みです。

雨の日はひなたぼっこは出来ません。その時は部屋の中からガラスドアを通じて静かに草木を濡らす雨を眺めます。モチも一緒です。音楽でも聴きながら、一杯の紅茶を楽しみながら、しばし、自然を眺めます。先日は蜘蛛の糸が雨粒に光っているのに気づきました。それにしても正確無比なデザインの網を作るもんですね。最近、動植物に対する尊敬の念が生まれています。ひょっとしたら、人間の私達よりは立派なのではないでしょうか？私が外出から戻って来ると、妻は見向きもしない時がありますが、モチだけは絶対欠かさず、いつも尻尾を振って飛びついて来ます。実に忠実で愛情深いです。

## 《ひなたぼっこと健康》

ひなたぼっこでの発見を縷々お伝えして参りましたが、ひなたぼっこには健康上の優れた効能もあるそうです。太陽の光は、紫外線の働きで、血液中のコレステロールをビタミンDに変えるそうです。ビタミンDは歯や骨を強くして呉れるそうです。高コレステロールでホームドクターに叱られている私には、この点でもひなたぼっこは良いようです。もちろん紫外線を長時間浴びるのは逆に良くないそうですが、短い時間なら大いに勧められるそうです。かわら版読者の皆様にも穏やかな陽光の中でのひなたぼっこを大いにお勧め致します。

# チャランポランの会
# 第一回 シニアと子供の交流会

「おじいちゃんおばあちゃんとお友だちになる会」が昨年11月、ロミタ市にある西大和学園で開催されました。同学園からは4歳から7歳までの子供達31名とチャランポランの会と友カフェから合わせ総勢15名のシニアが参加しての交流でした。お手玉、綾取り、折り紙などをシニアが子供達に教え、お礼に子供達が舞台に上がり、一生懸命に練習したダンスを見せてくれました。

## シニアから

●坂田英夫さん
子供達との交流会に参加でき、本当に良かったと感謝しています。純粋でエネルギーに溢れる子供達を見ると、胸に込み上げるものがあり、涙が止まりませんでした！

●松永典子さん
久しぶりに小さな子供達に接して楽しかったです。けん玉は意外と難しかった。でも子供達が教えてくれて、会の終わりには私も大分出来るようになりました。帰りに子供達が挨拶しに来てくれたり、ハイタッチしてくれたり、嬉しかったですね。

## 子供たちから

●もっとあそびたかった。
●とても楽しかった。次はいつやるの？●おやつのパリンコがおいしかった●またあそびたい。またみんな来る？

## 保護者から

●私達も楽しかった。
●子供達とシニアが一緒に遊んでる姿を見て感動しました。

# ロスの細道

「明けましておめでとうございます。

例年のことながら、丁度、電車の中でボーッとしていて、気がついたら乗り過ごして次の駅に来てしまったような感じで新年を迎えてしまった。

昔だったら大晦日は「お年取り」で、元日に数え年で一つ加齢（嫌な言葉だ）することになるが、この数え方は競走馬と同じ。もし加齢を元日にすることで馬並みになれるモノがあるなら、憲法改正論議に「加齢日の変更に関する法令」の一項を入れて欲しい。と願うは小生だけだろうか。

ま、そんなこんなで令和元年も終わったが、思えば昨年の日本は激動だった。中でも最大の事件は台風と豪雨のダブルパンチ。しかし、なんでこの２－３年台風は下手なゴルファーみたいに日本の南側から急にドスライスして列島を縦断するんだろう。地球温暖化なんて言うが、毎日が夏日では「温暖」って表現では生ぬるい。「熱帯化」でも足りないくらいだ。そのうち食卓にのぼる近海魚も熱帯魚と呼ぶようになるかもしれない。「これなんか、近海で獲れた活きのいい熱帯魚ですゼ」「ナンか暑ッ苦しそうな魚だがサンマに似ているなぁ」「ヘイ。だからサンマ―で」

処で小生は、というと、昨年何の前触れもなく急に「仏像彫刻」を始めてしまい、時々日本に修行に出かけている。７０の手習いだから、手が震えないか、果たしてそれなりの仏像が彫れるまで生きているかどうか。「後先考えず」と言うが、後は兎も角「老い先」を考えずにやってしまった。これを「無茶修行」と呼ぶ。
ま、ヤッテしまったものはしょうがない。ナニごとも途中で止めることは難しいのが世の習い。ひたすらイクとこまで行くしかないが、何とか観音様か弁天様を彫る所まではたどり着きたい。理由は特にないが。

年始早々、こんな駄文を書いていたら「千手観音」という古い噺を思い出した。

**『千手観音』**

ある、ひどく貧乏なお寺の和尚さんが、財政再建のために、寺代々の宝物で門外不出の千手観音さまのご開帳をやって、人を集めることにした。さていよいよ、千手観音さまのご開帳を始めると、「ありがたいお姿が拝める」と近郷近在から行列を作って人々が参詣に集まって来た。おかげでお寺は押すな押すなの大賑わい。

ある日の事、参詣人の一人が和尚さんに尋ねた。

**「千手観音という、この仏さまは、お手が千本もございますそうで」**
**「さよう」**
**「それなのに、お足の方はたったの二本。これはまあ、どうしたわけでございましょうか」**
和尚さんは観音さまに一礼してから、真面目な顔で答えた。
**「それは、大変良いところへお気がつかれましたナ。その『おあし』が足りませぬので、こうしてご開帳をいたしたのでございます」**

おアシがよろしいようで。　今年もどうぞよろしく。

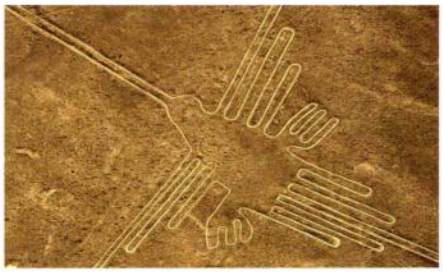
南亭気楽（ナンテイキラク）

## 未来を信じて

石口　玲

カレンダーがめくられた
一月になった
タダそれだけなのに
何と新鮮な気分になるものなのか
時間が経過し、今日になった、
という事だけなのに
身も心も何か新鮮になる
去年のいやな事、悲しくつらい事は忘れ
良い事だけを思い出し
今年はきっと良い事が来るさ
といつも考える
時間は前にだけ進む
過ぎ去った過去の修復は出来ない
でも、未来には計画も希望も持てる
過去は自分の土台で大切だけど
過去にかかわっていたら
いつもちっとも前に行けない
今日は寒かった、今日は強風だった、
でも明日は春の柔らかい風と
希望が吹いてくるさ
そう思うことにしよう
一月のカレンダーをめくり
新鮮な気持ちになったように
二月も、三月も四月も
いつもそう思って
いつもそう願って
私はカレンダーをめくる

# 読者から投稿・お便り



## 巨大な絵本ナスカ

ガーデナ市
タミー　米田

クローゼットの中を掃除していた時のことだった。大事にしまっておいた大学時代のスペイン語のテスト用紙に混じって一本のスライドが出てきた。ビニールのラミネートが所々穴があいていたり、破れたりしていて、年月の経過をつぶさに物語っていた。「ああ、これこんな所にしまってあったの。すっかり忘れていたわ」そのスライドは昔、私がユタ州立大学の学生だった頃、ペルーからの国費留学生からもらったナスカの地上絵だった。六枚のスライドにはそれぞれスペイン語と英語で宇宙飛行士、宇宙飛行士の丘、鯨、犬、花、台形と書かれていた。今までに見たこともない不思議な絵に見とれている私に、その大学院生は「将来、ペルーを訪れる機会があったら、ナスカの地上絵を見てくるといいよ。一見の価値があるからね」と言った。

あれから三十年の時が流れ、地上絵のスライドも私の記憶の片隅で眠っていたのだ。ところがそのスライドを見たとたん、ナスカ行きの思いが募り始めた。私は楠田枝里子さんの単行本「ナスカ　砂の王国」を読んだり、インターネットでナスカの歴史や地形を調べて旅行の準備を整えた。

二〇〇八年二月一六日早朝、快適な夜行バスでプーノから待望のナスカに着いた。人気のないバス停でタクシーを拾い、ホテルへ急いだ。ホテルでチェック・インをしているとき、ドイツ人のドクター・マリア・ライへのブロンズ像が目にとまった。過酷な砂漠のナスカで地上絵の研究と保存に半生を捧げ、惜しくも一九九八年病気で亡くなったのである。一九五二年にドクター・ライへが発見したサルの地上絵はあまりにも有名で、ドクター・ライへの功績なしにナスカの地上絵は語れないと言われるほどである。

翌日、地上絵の遊覧飛行にでかけ、アエロ・コンドル社の小型セスナ機から長年の夢だったナスカの地上絵を観察。

「ほら見て。コンドル！」

「見て見て。サル！　イヌ！

ウチュウヒコウシ！　クジラ！」急降下したり、旋回したりしながらパイロットが片言の日本語で説明。あまりの速さとスケールが大きすぎてすぐ見失ってしまった。パイロットの指差す方向の地上絵を見るだけで精一杯で、写真を撮るのが追いつかないほどであった。気が遠くなるような広大な大平原に無数の地上絵が寄り添うように散在していた。ハチドリ、グンカンドリ、オウム、パリワナ、イグワナ、クモ等の鳥類や動物や昆虫。渦巻き、矢印、三角形、台形等の幾何学図形もあり、花、木、魚、扇、手までが色を添えていた。まさに巨大な絵本の登場人物のように勢ぞろいして。誰が何のために巨大な地上絵を作ったのか。ドクター・ライへの天文学説をはじめ、空飛ぶ人間説、ナスカ人の祭りの場所説、古代旅人の道しるべ説、果ては宇宙人との交信説までである。どの説も一理あるが、これはナスカの地上絵の解明に余念がない研究者への大きな課題である。これこそ大古の昔からナスカをじっと見守ってきた巨大な絵本の登場人物だけが知っている謎である。

「ナスカでは
　マリアのサルがお出迎へ」

## 我が青春回顧録　－その１－

石口　玲

私は自然が大好きです。
大学時代は重い尺２のザックを背負い、ワンダーフォーゲル部員でした。

夏休み合宿から、１０日ぶりで帰宅すると父が言いました。

「一寸待て！座敷に直接入るな。臭エンだよ、お前は。風呂場に行け。其処でまず髪も身体も、兎に角きちんと洗え。石鹸をよーーーッくくっつけてな。しっかり洗ってこい。サッと流して風呂に入るのは駄目だぞ。２回は洗え。それから風呂に浸かれ」と言われます。１８歳の娘は汗臭いし、脂ぎってて、汚れています。おしゃれして着飾る女の子からは程遠い、山好きの学生でした。普段は反抗する私も「ハーーイ！」。

風呂場でまず身体をザーザー流します。久方ぶりの温かいお湯は気持ちよく、フーッと息が洩れます。１回目は洗っても泡が良く立たない。２回目でやっと自分でもまともだなと感じます。髪も２回から３回洗います。そして、湯船に浸かった時の気持のイイコト。天国行き列車に乗った気分です。やっと風呂から上がってタオルを巻いて出てくると、「汗が収まったら、風呂も風呂場も洗え、お前の使った後の風呂なんて誰も使えん」。「ハイハイ。お父さん大丈夫ですよ」母はそう言って風呂場を洗い出してくれます。「アラマア。変なにおいがすること」母の声が聞こえます。ばたばたと窓を全て開けている様子です。「母さ～ン。私が洗うよ」とは口だけの私。服を着替えて飲む冷えたジュースが喉に滲みます。

「俺にゃチーーッともワカラン。このクソ暑い時期に戦時中の買出しみたいな恰好しやがって、あんなでっかいリュック背負って、何が面白いのかねえ」、東京の下町生まれ、落語好きで、酒好きで、吉原通いの若い時を過ごした父には、あの雲海や、肩を組んで山の歌を仲間と歌い、飯ごう飯を食い、登る辛さ、下る辛さ、そして下山後の達成感を理解しろ、といっても無理な話です。

**山登り往きは良い良い帰りは【臭い】**

今は昔、６０年前の話です。

## 川柳を楽しむ

厳かに儀式令和の光見る　土本かほる
まだ元気一人強がりいつまでも　保坂ユウ子
九十過ぎ忘れぬ無念ありまする　井上健一
失恋で深く傷つき次の恋　河野　芳美
運勢を深く思わず前進す　レナ　パルマー
わが亭主油断大敵休火山　笑子
高山に鳥鶴亀の雲浮かぶ　おたんこナース
我世代馬車馬のごと走り抜け　紙谷トム
不思議ねえ文字がなくてもキープ（結び目）あり　タミー米田
かみさんと無言戦争いつも負け　小笠原軽平
別腹とけんかしているダイエット　迷い人
そろそろと忘れてほしい誕生日　大沢早苗
性格もお好み焼きも三枚目　ムーミン
にっこりと笑顔でお釣りごまかされ　ウノマリ
甘えたらその後つけが倍返し　笙子
手形跡鏡に残して孫帰る　森田のりえ

あけみ

さなえ

第一回　ロサンゼルス

# 川柳グランプリ開催

## 3月7日（土）

**2 pm~4 pm (開場1:30pm)**

**New Gardena Hotel**
**1641 W Redondo Beach Blvd.**
**Gardena, CA 90247　☎(310)327-5757**

日本より第16代目川柳、尾藤川柳先生をお招きし、第一回LA川柳グランプリを3月7日に開催いたします。当日は入選作品の発表の他、尾藤先生による川柳のお話、エンターテイメントと盛沢山。川柳が初めての方にも楽しんでいただけるイベントです。 是非ご参加下さい。

## 川柳募集！

季語や定型にこだわることなく、5・7・5のリズムに乗せて、米国生活で思うことや、出来事を表現してみませんか？

テーマ
『アメリカ』

| | |
|---|---|
| ■ グランプリ | 1名 |
| ■ 優秀賞 | 3名 |
| ■ 入　賞 | 5名 |
| ■ 審査員特別賞 | 1名 |
| ■ TJS　賞 | 1名 |
| ■ 日刊サン賞 | 1名 |
| ■ チャランポランの会賞 | 1名 |

作品は未発表のものに限ります。又応募作品の著作権はチャランポランの会に帰属します。

■ **応募方法：①氏名　②雅号　③性別　④住所　⑤電話番号を明記の上、下記までお送り下さい。応募作品は応募用紙または紙に必要事項をわかりやすい書体で記入し一人1句のみ、お送りください。Eメールでも受け付けます。 テーマは『アメリカ』です。**

■ **応募締切：2月21日（金）**

■ **応募先：** Charan Poran USA
22301 S Western Ave. #104 Torrance, CA 90501
Eメール　charanporanusa@gmail.com
☎(310) 347-7300 (メッセージをお残し下さい)

■ **参加費：$10**　■ **定員：80名（定員になり次第、締め切り）**

- **入選者には盾と賞品を進呈**
- **応募作品は全て「かわら版　4号」に掲載**
- **来場者の皆様全員に粗品進呈**

【審査委員長】尾藤川柳（16代目　桜木庵　尾藤川柳）
女子美術大学特別招聘教授、早稲田大学エクステンションセンター川柳講座講師、川柳学会専務理事、「川柳はいふう」主宰。 編著書に『川柳総合大事典』、『目で識る川柳250年』、『川柳のたのしみ』、『鶴彬の川柳と叫び』他、テキストに『川柳染筆講座』、『川柳篆刻講座』、『川柳入門』、『短冊の書き方と鑑賞』他。

主催：チャランポランの会　　協力：マグナス、フレックス、ＴＪＳ、日刊サン、ラフ新報

「かわら版」はボランティアの方々のご支援により発行されております。従って、発行部数も限られておりますので、お読みになりましたらポイっと捨てずに、お知り合いの方にお渡し下さいますようお願い申し上げます。多くの皆様に読んでいただけたら嬉しく思います。

## 編集後記

▼昭和から平成へと元号が変わった1989年から30年の2019年、元号が令和となり、自分自身の平成を振り返ってみた方も多いのではないでしょうか？

私は年当時まだ学生で、週末のアルバイトとしてテレビ局のニュース部でお世話になっていました。そして、昭和天皇崩御の翌日の1月8日は日曜。いつものように局に入ろうとするとIDはもちろん、氏名・住所・電話番号などを記入するなど、これまでにないほど厳重体制に驚き、ニュース部内も普段週末にはいないお偉いさんが勢揃い。当時の小渕官房長官が「平成」と元号を発表するや否や、アルバイトの私に与えられた任務は放送エリア内に平成という地名があるかを探すことでした。結果、私ではなく、記者が見つけたのが、読み方は違えど同じ漢字2文字の「へなり」という地名の存在。取材陣は小雨の中「平成＝へなり」地区へと向かい、その日は時がいつもの何倍もの速さで過ぎていたような、でも1日がとても長く感じたことを覚えています。

そして2019年、令和元年。まさか自分が米国にいるとは。加えてちゃらんぽらんの会で素敵な方たちと多くの新しい出会いもさせていただき、あれもこれもと、とても楽しい令和の始まりとなりました。一説によると、歳をとればとるほど時間が早く経つ感覚が強くなるのは、感動がなくなるからだとのこと。あなたはどうですか？確かに子供の頃に比べると一年が過ぎるのは早いはず。しかし、このかわら版で紹介されている様々な想いや、米国日系人の歴史に触れ、尚且つ童心にかえって新しいことにチャレンジできるのがちゃらんぽらんの会なんです。2020年の1日、一日が、誰しも生まれて初めの1日です。

今年も素敵なちゃらんぽらんな年になりますように。（か）

▼川柳グランプリを開催すると決まってから、川柳とは何ぞや？という疑問を持ち、改めて川柳を知ることとなった。そして「これはなかなか奥深い」と素直に感じた。5・7・5の短い文なのに心に響いてくる、それがイイ。季語や定型にこだわっていないのが又イイ。そんなことがわかる日本人に生まれて良かった。

3月7日に開催される「LA川柳グランプリ」にわざわざ日本より来て下さる16代目川柳、尾藤川柳氏に今からお会いするのがとても楽しみ。素晴らしいイベントになること間違いなし！　是非多くの方にご参加頂けたらと思う。

さて、2020年（令和2年）となりチャランポランの会も亀さんの如くであるが前進し、お蔭様で会員数も90名を超えた。会費も無料のまま何とか持ちこたえている。正に、発起人の心意気がチャランポランでないことをひしひしと感ずる。又寄稿してくださる方々もボランティア、こういう世代の方々が国を支えてきたのだ。携帯さえあれば生きていけそうな世の中で、携帯を持って四苦八苦している方々を、「シニアだから・・・」の一言で片づけてはいけない。少子高齢化の時代だからこそ、世代を超えてつながることが大切であり、学びあうことも大切なのではなかろうか。「お年寄りを大切にする」ことは勿論だか、それは、ただ「シニアに楽させる」ということだけではない。チャランポランの会のシニアのように、巷には知的財産を抱えているシニアが沢山いるはず、若い世代はその知恵と経験を是非とも拝借すべきだと思う。（あ）

令和2年もチャランポランの会をどうぞ宜しく！
皆様からの投稿お待ちしております。

iphoneの場合、カメラ画面を左のQRコードに近づけると Open “clickitaudio.com” in Safari の画面がでるのでタップします。次に↑をタップすると、「ホッコリする話」を聞くことができます。

子

チャランポランの会は、シニアの方たちが、生きがいを持って、人生を楽しみ、健康で長生きすることを目的としています。シニアだからこそ言える苦言、提言、さらに、社会奉仕まで、参加される皆様と一緒に考え、つくり上げていく会です。

風に揺らいでいるチャランポランな葉っぱであっても、その木の根っこは長い人生を歩んできた分、どっしりと深く広がっているシニアの木。その「シニアのシニアによるシニアのための会報誌」が「かわら版」です。

今後のチャランポランの会、並びに「かわら版」をどうぞよろしくお願い申し上げます。